

青空

登場人物

1. 神林彩(アヤ・アヤちゃん)
2. 森下瞳(ひとみ・ひとちゃん)
3. 西田サチ(サチ・サッちゃん)
4. 山本かおる(かおる・カオちゃん)
5. 秋川有香(ユカ・ユカちゃん)
6. 嵐山ヤワラ(ヤワラ・ヤワラちゃん)

7. 近藤はるか先生(コンティー)
8. 松本洋子先生(マッシー)
9. 丸山みどり先生

10. 浅岡三波(ミナミ)
11. 高橋和恵(カズエ)

第一部 大雨洪水警報

◆大雨

舞台は十月のある土曜日・文化祭前日の私立七つ森女学院中学校三年F組の教室。
舞台前面客席側に校庭側の窓がある(ただし、あるという想定で実際の舞台には窓は存在しない)。下手は教室の前、上手は教室の後ろ、舞台背面は廊下側になる。
教室の壁は太平洋戦争について調べた掲示物で囲まれている。ただ掲示物は壁には
られているのではなく、壁の前に立てられた衝立にはられている。そのため、掲示
物の後ろに人が入ることができる。
舞台下手は私立七つ森女学院中学校の創立から現在に至るまでの歴史(特に戦時中
が中心)および戦時中の学校生活について調べたことが掲示されている。舞台中央は
太平洋戦争全般についての説明(主な内容は神風特別攻撃隊、空襲、B29)が掲示さ
れている。舞台上手はその当時の文化(流行歌、映画、小説等)、家庭生活(食事、服
装など)についての説明が掲示されている。

舞台上には机が四つ五つ合わさった形で上・下・中央に一箇所ずつ置かれ、その上
にはさまざまな戦争に関する資料や製作中の展示物および掲示物が置かれている。
また、見学者がくつろげるように、椅子が展示物の前に置かれている。
教室の床には効果音をかけるためのCDラジカセと照明効果を上げるための機材
(乾電池でつく非常用のランタン)が置かれている。

雨の音が響いている。舞台が明るくなると、教室では八人の生徒が掲示物を作成し
ている。一生懸命動いているのは、神林彩、森下瞳、山本かおるの三人。西田サチ
はボーッと立っている。秋川有香はダンスの練習をしている。嵐山ヤワラは柔軟体
操をしている。浅岡三波と高橋和恵の二人が、他のクラスの偵察をしに廊下に出て
行く。彩、瞳、かおる、サチ、有香、ヤワラの六人が教室に残る。
ヤワラが窓に近づき、窓を開けて外を覗く。
雨の音が大きくなる。
全員が、雨を眺める。
ヤワラが開けた窓を閉める。

有香　ねーっ、雨強くなってきたよ、もう帰らない。
彩　　まだ展示全然終わってないのに帰れないでしょ。
有香　でも、台風が…
瞳　　有香ちゃん、台風はまだ大丈夫だよ。
有香　あたし帰るから。
瞳　　有香ちゃん…
彩　　有香、今残ってるの誰のせい。
有香　…だって、あれはサチが…
彩　　戦争についてのインタビュー、サチに任せたのは誰？
有香　あたしだけだよ、でもあたし、サチ、ちゃんとインタビューやったと思ってたし。
サチ　あたしちゃんとインタビューやったよ。彩ちゃんにも昨日インタビューした内容見
せたじゃない。そしたら彩ちゃん、こんなの役に立たないって、全然見ないで返した

でしょ。

彩 見たよ。見ましたよ。ちゃんと。でもそこに何書いてあった。

ヤワラ 何が書いてあったの？

彩 インタビューしたおばあちゃんが「今気になること」。確かにわたしが作ったインタビューにその質問はあったんだけどさ、その答え何だったと思う。

ヤワラ 何だったの？

彩 エロ。

ヤワラ エロ？

サチ そんなこと書いてないよ。

彩 あったじゃない。でっかくエロって。

ヤワラ なんだい、サチがインタビューしていたばあさんってエロばあさんかい。

サチ あたしそんなこと書いてない。それに花さん、エロばあさんじゃないもん。

彩 (瞳に)それに好きな食べ物とか書いてあってさ、それ、私がインタビューしてくれて頼んだ内容と違うんだ。戦争とも全然関係ないし。

瞳 彩ちゃん、いいじゃない好きな食べ物聞いたって。

サチ あたし、好きな食べ物なんて聞いてないよ。

彩 でもインタビューの答えに書いてあったじゃない。イクラって。

サチ それ、好きな食べ物聞いたんじゃないよ。それも今気になることだよ。それに、イクラって戦争に関係あるでしょ？

瞳 サッちゃん、何でイクラが戦争に関係あるの？

サチ イクラってアメリカと戦争したでしょ。

かおる それってイラクのこと？

サチ (あっ…)

彩 サチ、イラクとイクラ間違えるなよ。

瞳 彩ちゃんいいじゃない、イラクとイクラは間違えてもしかたないよ。

彩 でも全然違うよ。

瞳 そうだけど、イラクとイクラだから、イラクとすき焼きじゃないんだから。

サチ あたし、イラクとすき焼きは間違えないよ。

かおる サチ、

サチ 何？

かおる さっきのエロってもしかしてテロ？

サチ そうだよ、テロだよ。あたしちゃんとテロって書いたよ。

彩 エロだったよ。

瞳 いいじゃない、テロでもエロでも。同じようなものじゃない。

彩 (えっ)瞳、テロとエロは違うんじゃない。

サチ あたし、テロって書いたよ。

彩 エロだよ。

サチ じゃ証拠見せようか。あたし、あのインタビュー書いたの、今持ってるんだから。

サチがインタビューを書き取ったものをかばんから取り出す。

サチ ひとちゃん、見てよ、これだよ。(インタビューを瞳に渡す)

瞳 サッちゃん、これしまっておいた方がいいよ。

サチ (えっ…)

瞳がサチにインタビューを渡す。

彩がそれを取りあげる。

彩　ほら、やっぱりエロって書いてるよ。

瞳　彩ちゃん、人間誰でも間違いはあるから。

彩　でも普通の中学三年生はテロとエロは間違えないんじゃない。

有香　サチ、漢字ならともかく片仮名間違えるなよ。

彩　サチさ、インタビューの最初からイクラにエロじゃ、誰だってこれ使えないって思うんじゃない。それにさ、私、もっとももっとたくさんの質問、書いて渡したでしょ。で、何でこれだけなわけ？

サチ　あたし全部インタビューしたよ。でも花さんが答えた内容がよくわからなくて、書き取れなかったの。

彩　何でよくわからなかったの？

サチ　インタビューの内容、戦争の頃のことだったでしょ。なんか、あたしが知らない言葉がたくさんあって、それで…

彩　有香がサチに任せるから。

有香　だって。

瞳　もういいじゃない。ねっ、展示進めない。

サチ　彩ちゃん。花さん、インタビューの質問の答え書いて学校に送ってくれるって。

彩　で、それ届いたわけ。

サチ　まだだけど…

彩　じゃだめじゃん。

サチ　…

彩　サチさ、花さんのところに何回も行ってたよね。いったい何してたわけ？

サチ　花さん、一人で暮らしてるでしょ。あたしが来ると楽しいから、遊びにおいでって。だから…

彩　遊びに行ってたんだ。

サチ　(うなずく)花さんとっても喜んでくれたから…

ヤワラ　彩、花さんって何者なわけ？

彩　(あー)高田花さん。終戦の年にこの学校を卒業した人。そんな人のインタビューがとれたら、展示がすごく面白くなるなって思って、コンティニーに頼んで紹介してもらったんだ。

瞳　近藤先生が紹介した人なんだ。

彩　(うん)卒業生名簿とか調べて、探してくれて。インタビュー、私が行ってもよかったんだけど、展示全体のことやらなくちゃいけなかったから、インタビューする内容書いて有香にインタビュー頼んだら、有香それサチに頼んで、それでこうなったってわけ。

有香　あたしも忙しかったから。

彩　忙しかったって、有香、部活入ってないじゃない、放課後暇だったでしょう。

有香　だって…、あたしダンスのレッスンあったし…

彩　(もー)

瞳　ねっ、彩ちゃん、展示進めよう。

ここでそれぞれが展示の作成を進める(特に彩、瞳、かおるの三人)。
展示が少しずつさまになっていく。
そこに三波と和恵が戻ってくる。

三波 偵察任務完了。

彩 三波、どうだった他のクラス。

三波 G組。『The Magic』だって。三十分に一回マジックショーやるらしいよ。

彩 うわっ、それ思いっきり客集まりそう。

和恵 それとB組、アニメ特集。あれきっとたくさん人集まるよ。

有香 うわっ、あたしそれ見たいんだけど。ヤワラ、見に行かない。

ヤワラ 行く。

有香とヤワラが見に行く。三波と和恵がその後についていく。彩、かおる、サチも
その後が続く。瞳が一人教室に残る。

瞳がそこまでに完成している展示を読んでいる。そして、その後机に座って何かを
書き始める。

彩が戻ってくる。

彩 瞳、何してんの。

瞳 (書いているものを反射的に隠して) ちょっと。で、どうだった？ 展示。

彩 (うん) すごい、悔しいけど、負けてるかな…、瞳も見てください。

瞳 うん…。

彩 (瞳が隠したものを見て) それ、何？

瞳 (うん)

彩 何なの？

瞳 小説。

彩 小説？

瞳 うん、中学生対象の小説コンクールに応募しようと思って。

彩 そんなコンクールあるんだ。

瞳 うん。

彩 (ふーん) すごいね、それ。

瞳 彩ちゃん、戦争の話ってどうかな？

彩 戦争？

瞳 うん。戦争のこと調べてたら、ちょっと興味持っちゃって。今時、中学生で戦争の
話書く人なんてそんなに多くないから選ばれやすくなるかなって。

彩 (うーん) そうね、いいかも。

かおるが戻ってくる。

彩 瞳、どんな話にするの。

瞳 それなんだけど、タイムスリップものなんかどうかなって。学校のあるクラスの全
員が戦争の時代にタイムスリップしちゃう話。

彩 そこで殺し合いでも始まるわけ？

瞳 そんな話じゃなくって、そこでみんなが何とかして生きていくっていう話。

かおる それ何のこと？

彩 (あつ)瞳が戦争の小説を書くんだって。

かおる (ふーん)

瞳 登場人物、私たちみたいな中学生がいいかな。

彩 (うん)その方が創りやすいんじゃない。

瞳 戦争の時、私たちみたいな中学生の女の子どうしてたのかな。

かおる 正確にいうと、戦争の時は中学生の女の子っていなかったんだけどね。

彩 どういうこと？

かおる さっき、ちょうどそここのとまとめてたんだけど、(手元にある模造紙を示して)。

戦争の頃の中学校って男子だけが通う学校で、女の子は中学校へは行けなかったんだ。

瞳 女の子はどうしてたの？

かおる 高等女学校に行ってたんじゃない。

瞳 高等女学校？それじゃ、七つ森中学校って戦争の時は男子の学校だったの。

かおる そうじゃなくて、ほら、それはそこに書いてあるじゃない。「私立七つ森女学院
中学校の歴史」のコーナー。ここは戦争の時は私立七つ森高等女学校だったの。

瞳 そうなんだ。

かおる その当時は、一クラスで四、五人しか高等女学校までは行かなかったみたいだけ
ど。

瞳 学校行かない人たちはどうしてたの？

かおる 働いたんじゃない。

瞳 その頃は私たちくらいの女の子、みんな働いていたの。

かおる 十人中九人はそうなんじゃない。学校に行っていない私たちくらいの女の子は女
子挺身隊っていう組織に入って、工場で働いていたって資料に書いてあった。それと
(資料の一つを示して)ここに書いてある学徒動員っていうのがあって、戦争終了一年
前の昭和十九年からは中学生と高等女学校以上の生徒は全員工場などで働いたって。

瞳 そうなんだ。

有香、ヤワラ、サチが戻ってくる。

ヤワラ (自分たちの掲示物を見て)なんか、うちの展示、他と較べて淋しくない。

かおる 戦争だからね。

彩 ヤワラ、どうやってお客を集めるか考えてくれた。

ヤワラ まかせて。柔道部の後輩に声かけてあるんだ。うちのクラスの展示必ず見に来い
って。

彩 柔道部の後輩って何人いるんだっけ。

ヤワラ 三人。

彩 三人！それだけじゃだめだよ、もっとたくさん、ばーって来てもらわないと。

ヤワラ でもうちの展示、戦争でしょ。それもすごく真面目な。たくさん人集めるのち
よつと無理じゃない。

彩 そこを集めるのがヤワラの役目でしょ。ヤワラ、部活が忙しいって言って展示の仕
事は全然やってないんだから。人集めくらいちゃんとやってくれないと。

ヤワラ まっ、一応アイディアはあんだけどさ。

ヤワラがそう言って、モデルガンを出す。

彩　　それ何に使うの？

ヤワラ　有香、いくよ。

ヤワラが突然有香に銃を向ける。

有香が逃げる。

途中で有香が銃で撃たれるような状況が生まれ、有香は演技でもだえ苦しみ倒れる。

ヤワラ　（笑いながら）馬鹿なやつ。（サチに）ほら、手をあげな。（サチが手をあげる）よし、命が惜しかったらうちのクラスの展示を観に来な。

彩　　ヤワラ、真面目に考えて。

ヤワラ　…

彩　　サチ、有香、ちょっといい？

彩がもんぺを取り出す。

彩　　これはいてみて。

有香　何これ、もんぺじゃない。

彩　　明日二人でこれはいて、呼び込みやって。

有香　あたしが？やだ、あたしこんなのはくの。

彩　　仕事全然やらなかったんだから、これくらいやりなさいよ。

有香　絶対やだし。

彩　　（もー）

有香　（窓の外を見て）ねー、雨強くなってきたよ、もう帰らない。

彩　　まだ、展示全然終わってないのに帰れないでしょ。

有香　あたしなんか家まで一時間かかるんだよ。

彩　　私は一時間半だよ。

有香　電車止まったらどうするわけ。

彩　　止まらないって。台風上陸するの今夜でしょ、まだ大丈夫だって。

有香　じゃ、あたし一人で帰る。

彩　　有香、私たちが今作ってる「戦時中の大衆文化」って誰の担当。

有香　…

彩　　有香でしょ。でも有香仕事全然しないでヤワラとふざけてるから、私たちが手伝ってるのにかってなこと言わないで。

そんな話をしている間にサチはもんぺをはき終えている。

瞳　　サッチャン、似合うよ。

サチ　ひとちゃん、ありがと。

彩　　有香もはいて。

有香　絶対やだし。

◆警報

三波と和恵が教室に飛び込んでくる。

三波 大変、大変。

彩 どうしたの？

三波 彩、先生、階段のぼってくるよ。

彩 先生って？

三波 コンティ―とマッシー。

和恵 どうする？

彩 みんな、どこでもいいから隠れて。

みんな教室やベランダなどの隠れることができそうな場所に隠れる。

雨の音が響く。

廊下から近藤先生と松本先生の声が聞こえてくる。

その声はだんだんと教室に近づいてくる。

近藤先生と松本先生が教室に入ってくる。

近藤先生はこのクラスの担任である。

近藤先生は上手の「戦時中の大衆文化」の展示に近づき、それを見つめている。

松本先生 (展示を読みながら)すごい。(近藤先生に)近藤先生。

近藤先生 (松本先生の声に気づかず、展示を見つめている)

松本先生 (更に大きな声で)近藤先生。

近藤先生 (あっ)

松本先生 どうしたの？

近藤先生 (いえ)生徒を帰したときより、展示が進んでる気がして。

松本先生 太平洋戦争について、よくここまで調べたね。

近藤先生 今年の連中はよくやるんですよ。「絶対展示の最優秀賞取るんだ」って。松本先生 (あー)うちなんて、全然やる気なし。「台風のため全員下校」って連絡したら、みんな大喜び、まだ展示全然完成してないのに。

近藤先生 (ああ)

松本先生 先生のクラスは大変だったんじゃない、帰すの。

近藤先生 (ええ)すぐに自宅に帰りなさいって言ったら、みんなブーブー言って。今帰ったら展示が完成しないって。絶対残ってやるって。

松本先生 うらやましいなあ、先生のクラス。

近藤先生が窓の外を見る。

雨の音が響く。

近藤先生 雨、強くなってきましたね。

松本先生 (窓の外をみつめて、うなずく)

近藤先生 みんな、そろそろ家に着いてますかね。

松本先生 (時計を見て)いくらなんでも、もう着いてるんじゃない。

そこに丸山先生が入ってくる。

丸山先生 近藤先生。

近藤先生 はい。

丸山先生 先生のクラスの秋川有香って生徒、まだ家に帰ってないって、家庭から問い合わせ来てます。

近藤先生 (えっ)私、四時間前に全員帰しましたけど。

丸山先生 家庭には、学校は一時に生徒全員帰宅させましたって伝えました。そしたら心配なんで場合によっては警察に連絡するって、

近藤先生 警察…。

教室のどこからか「警察」という声が聞こえてくる。

有香の声である。

松本先生 誰？

有香が隠れている場所から出てくる。

近藤先生 秋川さん、あなた何でこんなところにいるの？

有香 …

近藤先生 答えて。

有香 展示が終わらないんで、それで…

近藤先生 一人で…

有香 いえ…

近藤先生 他にも残ってる子がいるの？

有香 あっ、はい。

近藤先生 出てきて。

誰も出てこない。

近藤先生 出てきて！

一人二人と生徒が出てくる。

近藤先生 あなたたち、どうして。

彩 展示…やってみました。

近藤先生 (えっ？)

彩 全然完成してなかったから…、私が、みんなに頼んで…

近藤先生 すぐ帰りの支度して。

丸山先生 近藤先生。ちょっと待ってください。

近藤先生 …

丸山先生 帰れないんです。

近藤先生 (えっ)

丸山先生 さっきから電車動いてないんですよ。学校の前の…

彩 電車止まっちゃったんですか。

丸山先生 (うん)今このあたりに大雨洪水警報が出てる。

ヤワラ　　すげー。大雨洪水警報だって。
有香　ヤワラ、何喜んでんのよ。
近藤先生　車で親に迎えに来てもらいます。
丸山先生　それが…、
近藤先生　…
丸山先生　道路もあちこちで通行止めに…
近藤先生　（えっ…）

生徒たちがざわざわする。

近藤先生　この中で徒歩で通学してるのは誰だっけ？

三波、和恵が手をあげる。

近藤先生　あなたたちはすぐ家の方に迎えに来てもらいます。
有香　あたしたちは？
近藤先生　あなたたちは、電車通学よね。
有香　はい。
近藤先生　今は帰れないわね。
有香　どうしたらいいわけ？
松本先生　このまま電車が動かなかったら、学校に泊まるしかないんじゃない。
有香　学校に…
ヤワラ　やったー。
有香　ヤワラ、なんで「やったー」なわけ。
ヤワラ　いや、学校に泊まるなんてなんか、ちょっと…
丸山先生　近藤先生、
近藤先生　…
丸山先生　すぐに各家庭に連絡しないと。
近藤先生　はい。

丸山先生と近藤先生が教室を出て行く。

松本先生　みんな、職員室に来なさい。
みんな　…

松本先生が廊下に出て行く。
三波、和恵が後についていく。

ヤワラ　学校に泊まりだー。
有香　何喜んでんのよ。
ヤワラ　なんかわくわくしない、学校に泊まるなんて。
有香　お風呂どうしたらいいの？
彩　有香、風呂くらい一日入らなくても死なないって。
有香　だから、死ぬとか死なないとかっていう問題じゃなくって、嫌なの。あたし、お風

呂はいらないで次の日誰かに会うなんてできない。

彩 ったって、明日はみんなここに来るし。ここから家に帰るにも途中人に会わずには帰れないでしょ。

有香 あたし、明日学校休む。

瞳 ユカちゃん、ここ学校だよ、休めないよ。

有香 だからあの時帰ろうっていったのに。

ヤワラ あたし、わくわくする。ちょーいいじゃん、学校に泊まるなんて。外は台風だし。

有香 どこがいいのよ。

松本先生が再び現れる。

松本先生 秋川さん、早くしないと家の人警察に連絡しちゃうよ。

有香 あちゃー。

有香が慌てて教室を出ていく。

その後、みんなが教室を出て行くところで暗転。

嵐の音が響く。

第二部 暴風雨洪水警報

◆暴風雨

嵐の音が大きくなる。外は暴風雨である。

明かりがつくと、六人の生徒が掲示物を作成している。

相変わらず一生懸命動いているのは、彩、瞳、かおるの三人。

サチはボーッとしている。ヤワラは柔道の練習をして汗をかいている。

ヤワラが中央の窓に近づき、それを開ける。

掲示物が大きく揺れ、机の上に置いてあった資料が叫び声と共に風に舞う。

みんなが慌ててそれを拾ってまわる。

有香が「髪、乱れるし」というような文句をヤワラにぶつけながら窓を閉める。

彩 ヤワラ、何考えてるわけ。

ヤワラ (笑いながら)ごめん。

有香 三波たちもう家に着いたかな。

かおる 着いたんじゃない。もうあれから二時間たってるし。

ヤワラ 腹へったー。

有香 ヤワラ。さっきまで学校に泊まることあんな喜んでたのはどこの誰？

ヤワラ 腹へったー。学校に食べるものないなんて考えてなかった。

松本先生が入ってくる。

服が濡れている。

瞳 松本先生、どうしちゃったんですかそんなに濡れちゃって。

松本先生 近くのコンビニで何か食べるものでも買ってこようと思って。

ヤワラ さっすが先生。

松本先生 でも、この嵐でしょ、コンビニ全部閉店。

有香 あちゃー。

ヤワラ 腹へったー。

彩 松本先生。電車、まだ動きませんか。

松本先生 動くの無理なんじゃない。

有香 大雨洪水警報か…、最悪！

松本先生 (あっ)さっきそれ、暴風雨洪水警報に変わった。

有香 あちゃー、更に最悪。お風呂、絶望的。

松本先生 あなたたちがこんな嵐の中残ってるから、おかげで私まで…

ヤワラ 先生、どうぞ帰ってください。

松本先生 生徒だけ学校に泊めるわけにはいかないでしょ。

ヤワラ (はぁ)

松本先生 校長先生に電話したら、生徒と一緒に学校に泊まってくれって。近藤先生なんか、校長先生に「指導ができてない」ってずいぶん叱られちゃって。

有香 あちゃー。コンティナーかわいそう。

近藤先生が入ってくる。

彩 すみません。

近藤先生 (何?)

彩 勝手なことして…

近藤先生 (笑って彩の肩に手を置いて)もういいから。

近藤先生がかばんから袋を出す。

近藤先生 はい、差し入れ。

ヤワラ (わーっ)どうしたんですか、それ？

近藤先生 職員室の戸棚にあった食べ物。少しは腹の足しになるでしょ。

ヤワラ 先生、これ食べていいですか。

近藤先生 (うん)

ヤワラ いただきまーす。

袋の中にはお菓子が入っている。

ヤワラがそれを食べ出し、それに続いてみんなも食べ出す。

松本先生 普段だったら夕食の時間だもんね。

彩 先生。

近藤先生 (うん?)

彩 展示、進めていいですか。

近藤先生 …(展示を見つめる)

松本先生 いいんじゃない。

彩 他のクラスからずるいって言われませんか。

松本先生 大丈夫じゃない、文化祭一週間延期になったから。

彩 そうなんですか？

松本先生 (あー)、全家庭に連絡されたはずだけど。

サチもお菓子を食べ始める。

近藤先生 サッチャン、どうしたの？

サチ (えっ？)

近藤先生 その格好。

サチ (あっ)これ、展示の呼び込みで彩ちゃんが着ろって。

近藤先生 (ああ)

みんなが楽しそうにお菓子を食べている。

松本先生が近藤先生に話しかける。

松本先生 それじゃ私たちは校舎内見回ってくるから。

近藤先生と松本先生が教室を出て行く。

彩 サチさ、そのかっこうでおかし食べてると、なんか戦時中の女の子になったみたいだね。

瞳 戦時中って、食べるもの全然なかったんでしょ。

かおる すごかったらしいね、ほらそこにまとめてあるでしょ、戦時中の食生活について。

サチ カオちゃん、戦争の時ってみんなどんなもの食べてたの。

かおる 本当かどうかは分からないけど、捨てていたものの食べ方っていう資料には蜜柑の皮をすりつぶしてふりかけにする方法とかのこぎりの屑の食べ方とか書いてあるけど。

有香 のこぎりの屑なんてどうやって食べるわけ？

かおる 粉末にして小麦粉に入れてパンにするだって。

有香 うえー。

かおる それとここにはネズミって書いてある。

有香 ネズミ？

かおる うん。味は小鳥の肉の如しだって。

有香 あー、あたし死んでもそんなもの食べられない。

彩 ねっ、食べてるときにこんな話するのやめない。

サチ 花さん言ってた。戦争の時はお腹いっぱい食べられたことなかったって。

彩 イクラは食べられなかったろうね。

サチ 彩ちゃん、もうイクラはいいでしょ。

◆神風

瞳 サッチャン。

サチ 何？

瞳 花さんに、何でイラクとテロのことが気になるか聞いた。

サチ 聞いたよ。

彩 聞いたんだ。

瞳 何でなの？

サチ お兄さんのこと思い出すからだって。

瞳 何で、イラクとテロからお兄さん思い出すの？

サチ 花さんね、お兄さんがいてそのお兄さんが飛行機乗って、それで戦って死んじゃったんだって、神風(カミカゼ)何とかっていう。

かおる あー、神風(シンプウ)特別攻撃隊。(展示物でそれが説明されてある場所を指して)。そこに書いてあるでしょ。昭和十九年十月にアメリカ軍のフィリピン上陸作戦がはじまると、レイテ沖海戦で神風(しんぷう)特別攻撃隊がはじめて編成され、二五〇キロ爆弾を積んだ航空機を、アメリカの空母に体当たりさせた。アメリカ兵はこれを「カミカゼ」といって恐れた。

有香 それって、はじめから死ぬって決まってるってこと。

かおる そういうこと。

有香 日本も自爆テロみたいなことやってたんだ。

かおる 神風(カミカゼ)が自爆テロと同じとは思わないけど。

有香 テロとエロくらい違う？

かおる …(考えて)、えっ、…どうなんだろう。

有香 (えっ)何、考えちゃうんだ。

瞳 花さんもそんなこと考えたのかな？

有香 テロとエロ？

瞳 有香ちゃん、もうエロから離れない。

サチ 花さん、自爆テロの話聞くと死んだお兄ちゃん思い出しちゃうんだって言ってた。

瞳 それで気になることがイラクとテロ。

有香 あたしわかんないんだよね、自爆テロとかやる人。だって自分も死んじゃうわけじゃない。何でそこまでやるのかなって…

瞳 神風(カミカゼ)の人は何のために死んでまでして敵に体当たりしたのかな。

かおる 死ぬ前の手記とか残ってて、祖国とか家族とかのためだったみたいだけど、悩んで苦しんで飛行機に乗った人も多かったみたい。

サチ (ふーん)カオちゃん、なんかその時代に生きてみたいだね。

かおる その時生きてたらもう六十歳、あっ、その当時十五歳だったら七十歳過ぎてなくちゃ。

サチ もしかして、カオちゃんその時代から飛んできたんじゃないの。ほらテレビドラマとかでよくあるじゃない、タイムストリップとかいう。

彩 サチ、今なんて言った。

サチ タイムストリップ。

瞳 サっちゃん、それはタイムスリップだよ。

サチ あっ、それぞれ、タイムスリップ。

彩 サチ、エロの次はストリップかい。

有香 あー、あたしこの前それと逆のタイムスリップのドラマ見た。平成の時代の家族が、そっくりそのまま戦争のまっただ中にタイムスリップしちゃうの。

サチ (へー)、それでどうなるの。

有香 はじめは警察とかに疑われるんだけど、みんななんとか生きていくんだよね。

かおる ドラマだからね。

瞳 (何か思いついて)私たち、もしこのまま戦争の時代にタイムスリップしたらどうなるかな。

かおる 怪しまれるんじゃない。

瞳 どうして？

かおる 私たちの格好どう見ても戦争中の子供には見えないじゃない。

サチ あたし大丈夫だよ。だってあたし昔の格好してるでしょ。だからあたしは怪しまれないでしょ。

彩 でもサチその時代のこと全然知らないでしょ。警察の尋問受けたらすぐぼろでるでしょ。

サチ 尋問って？

彩 質問。警察がいろいろ聞いてくるの。

サチ 好きな食べ物とか？

瞳 サッちゃん、尋問で好きな食べ物は聞かないと思う。

彩 サチ、「あなたの学校は」って聞かれたらどう答える？

サチ はい、七つ森中学校です。

彩 サチ、もうぼろでてるよ。

サチ 何で？

彩 かおる、教えてあげて。

かおる 戦争の頃の中学校って男子だけが通う学校なの。だから、サチは中学校へは行けないの。

サチ 間違えました。あたしが通ってるのは七つ森小学校です。

有香 サチなら小学生で通るね。

ヤワラ 通る、通る。

かおる だめだめ。

サチ 何で？

かおる アメリカとの戦争が始まる年に小学校は国民学校に名前が変わるの。だからその当時小学校は存在しないの。

サチ やっぱりカオちゃん、戦争の時からタイムスリップしてきたんでしょう。カオちゃん詳しくすぎる。ほんとのこと言うなら今のうちだよ。

かおる (笑って)まいったな。

瞳 私たちタイムスリップしたらそこで生きていけないかな。

有香 瞳、どうしたの、さっきからタイムスリップにこだわって。

彩 瞳、小説書くんだって、戦争の時代に私たちみたいな中学生がタイムスリップする。

瞳 暴風雨洪水警報の中でみんなが戦争の話しているといつのまにか、暴風雨洪水警報が空襲警報に変わっているっていう話ってどうかな。

有香 何それ？

瞳 こんなふうに戦争の展示に囲まれて、戦争の話をしていたら、いつの間にか空襲警報が聞こえてきて、ここが戦争中の学校になっちゃってるの。それ、今の私たちをモデルにして考えてみたらどうかなって。

サチ それじゃ、その小説にあたしも出てくるの？

彩 出るんじゃない。エロとかストリップとか言うアホ少女で。

サチ 何よそれ。

ヤワラ 面白そうじゃん、その話。

有香 エロとかストリップ。

瞳 有香ちゃん、私そんな話、書かないから。

サチ それであたしたちどうなるわけ。

瞳 どうって…、かおるちゃん、この学校って空襲で燃えたんでしょ。

かおる うん。(掲示物を示して)昭和二十年五月二十五日。空襲で木造校舎全焼。

瞳 その日に、空襲に遭う前のこの学校にもしタイムスリップしたら。

かおる 逃げるしかないんじゃない。

瞳 どこに？

かおる ここじゃ、あそこの七つ森に逃げるしかないでしょ。

みんなが七つ森がある下手前方を眺める。

かおる もし助かっても、その後が大変だね。

瞳 …

かおる さっきも言ったけど、怪しまれるんじゃない、この町の人に。

瞳 どうしたらいいかな。

かおる 助かるとしたら、誰かにかくまってもらうしかないかな。

サチ お父さんかお母さんのところにいけば？

彩 サチ、戦争って六十年以上前のことなんだよ、お父さんもお母さんも生まれてないのにどうやって会いに行くの。

サチ じゃ、おじいちゃんとおばあちゃんのところにいけばいいじゃない。

かおる みんなのおじいちゃんとおばあちゃんって、その頃何歳だった？

彩 私のところは十歳くらいかな。

かおる それって私たちより年下だよ。それじゃ、私たちをかくまったりできないんじゃない。

サチ それじゃ、ひいおじいちゃんとひいおばあちゃんは？

かおる 私たちタイムスリップしても家族には会っちゃだめだよ。

サチ どうして。

かおる 歴史が変わっちゃうじゃない。そうしたら私たち、存在しなくなるかもしれないよ。

瞳 タイムスリップしても、そこで生きていくって簡単じゃないね。

彩 空襲なんですよ、爆弾が落ちてくるんですよ。みんな生き残るの無理だよ。小説なんだからそんな深く考えなくってもいいんじゃない。何人か死んじゃってもしかたないよ。

有香 (あっ)あたし、死んでもいいよ。みんなを助けて怪我をするの、「みんな、逃げて、あたしにかまわず逃げて」。そこに爆弾が落ちてくる。そして炎に包まれあたしは死んでいく。涙、涙。

◆落雷

突然の稲光、それと同時に雷鳴。

電気が消える。

有香 何？どうしちゃったわけ。

彩 今の雷でしょ。近くに落ちたんじゃない。

有香 (いたっ!)ヤワラ、痛いんだけど。

ヤワラ 有香、ごめーん (わくわくして)あー外、真っ暗、全然何にも見えないよ(そういつて椅子にぶつかり椅子を倒す)。

彩 ヤワラ、真っ暗な中で動き回らないで。

サチ　ねっ、だれか電気つけて。

彩　　停電なんだから、電気つかないでしょ。

雷

サチと有香の恐怖の叫び。

稲光に生徒たちの姿が浮かび上がる。

ヤワラ　雷、チョーわくわくする(といってサチの手を握って、笑って)これ誰だ？

サチ　ヤワラちゃんやめて、くすぐったいよ。

ヤワラ　(笑う)これは誰だ？(返事がない)誰だ？誰だ？

声　　やめなさい。(ヤワラはやめない)やめなさいって言ってるでしょ。

電気がつく。

ヤワラが手をつかんでいるのは近藤先生。

停電の間に教室に戻ってきたようだ。

ヤワラ　コンティ―！

近藤先生　手を離して。

ヤワラ、慌てて手を離す。

近藤先生　さっき、サッチャンに渡すの忘れたんで戻ってきたの。そしたら、急に停電になっちゃって。

サチ　忘れたって、何ですか？

近藤先生　はい、これ。

近藤先生はサチに紙の束を渡す。

サチ　これ？

近藤先生　サッチャンがインタビューしていた高田花さんから届いたインタビューの答え。

今朝届いていたんだけど、渡すの忘れちゃって。

サチ　近藤先生、ありがとうございます。

近藤先生　(サチににこっと笑いかける。そしてみんなに)さてっと、私、職員室に戻るけどあなたたちはどうする？

彩　　もう少し展示のことやってていいですか。

近藤先生　私はかまわないけど。何かあったらすぐに職員室に来るのよ。

彩　　はい。

近藤先生が教室から出て行く。

サチ　ほら、彩ちゃん、あたしちゃんとインタビューの仕事してたでしょ。

彩　　(インタビューの内容をざっと見て)はいはい。

瞳　　彩ちゃん、それ見ていい。

彩　　うん。(瞳にインタビューが書かれた紙を渡す)

有香 瞳、それ読んでくれない。

瞳 (うん)。

「七つ森高等女学校での好きだった教科」英語。

「七つ森高等女学校での嫌いだった教科」作業とくに農作業。

「戦争の時よく読んだ本・雑誌」少女倶楽部。

「戦争の時好きだった歌」私の青空。

「戦争の時の将来の夢」宝塚少女歌劇団の男役。

「今だから話せる戦争の時の出来事」授業をさぼって宝塚歌劇団を観に行ったこと。

有香 戦争中も、授業さぼることできたんだね。

ヤワラ 授業をさぼって宝塚観に行くなんて、花さんて不良じゃん。

彩 好きな教科、英語っておかしくない？だいたい戦争中に英語の授業なんてあったわけ？

瞳 その頃ってカタカナ語が敵性語ってことで追放されていた時代でしょ。

有香 (あー)そんな時代に英語は教えないんじゃない。

彩 きっと花さんの記憶違いだよ、それ。

ヤワラ ぼけちゃったのかも。

サチ そんなことないよ。

かおる (資料を探している)あーっ、あった。「英語は昭和十八年四月から女学校では必要なしということで選択履修となった」だって。

彩 選択でとることはできたんだ。

有香 それにしても戦争中でしょ、普通とらないでしょ。

かおる 確かにあまりいなかったろうね、英語を選択した女の子。

ヤワラ やっぱり不良だったんだよ、花さんって。

サチ 花さん、そんな人じゃないよ。

有香 嫌いだった教科が作業ってのもまずくない。戦争の時ってみんな、国のために働いてたんでしょ…、それが嫌いだなんて。

ヤワラ ますます不良だね。

サチ そしたらヤワラちゃんだって不良じゃない。

ヤワラ どうして。あたしは真面目な熱血柔道少女だよ。

サチ ヤワラちゃん、柔道は一生懸命だけど、掃除とかしたことはないじゃない。いつも、掃除の時になるといなくなっちゃうでしょ。仕事しないでしょ。

ヤワラ あたし戦争の時だったら仕事したよ、絶対。

サチほんとに？花さん言ってた。戦争の時、学校が工場になって、朝は四時に起きて、五時に学校に行ってたって。夕方は夜七時までずっと働いていたって。

ヤワラ (うぁー)何それ！

かおる みんな本音じゃ、働くの嫌いだったろうね。正直には言えなかったろうけど。

瞳 かおるちゃん。花さんが読んでいた少女倶楽部ってどんな雑誌だったのかな。

有香 少女倶楽部ってなんか、おじさんが喜びそうな雑誌じゃない。

ヤワラ (あーっ)なんか少女倶楽部ってやらしい感じがする。

かおる 少女って今はそういう言葉なのかな。私、少女倶楽部のこと展示に使おうと思ってインターネットで調べたんだけど、そしたらロリコンとかそんなのばかりでできちゃって…

ヤワラ ロリコン！なんかやばくない、それ。

かおる ヤワラ、少女倶楽部はそんな雑誌じゃないって。

ヤワラ　どんな雑誌なわけ？

かおる　少女倶楽部は私たちくらいの女の子がみんな読んでた雑誌で、(かおるが机の上にある資料のページをめくって)これ、これ。これが少女倶楽部。

サチ　きれいな表紙だね。

かおる　発行部数は百万部。

有香　百万部！すごいね、それ。

かおる　私、少女倶楽部より花さんが好きだった『私の青空』の方が、まずいと思うんだけど。

瞳　なんで『私の青空』がまずいわけ？

かおる　それは…(展示を探して)あった。『私の青空』原題『My Blue Heaven』、昭和三年二村定一が歌って十数万枚売れるという当時としてはかなりの大ヒット。(展示の下の方に目をやって)昭和十八年一月十三日、内務省と情報局は『私の青空』などの英米音楽千曲を発表し、その追放に乗り出した。

瞳　花さんが聴いていたの、追放された音楽なんだ。

ヤワラ　ますます不良じゃん。

サチ　でも花さんが聴いてたの、日本の歌手が歌った『私の青空』じゃないよ。日本人が歌ったのはあまり好きじゃないから、アメリカからの輸入盤で聴いたんだって。

彩　サチ、そっちのほうがやばいんじゃない。

サチ　(えっ？)

かおる　うん、それ、もし見つかったら大変だったと思う。

サチ　大変って？

かおる　少なくとも警察には連れて行かれたでしょ。

サチ　警察に！音楽聴いただけで？

かおる　警察に連れて行かれるだけで終わればいいけど、下手すれば思想的に問題があるということで逮捕されて拷問ってことにもなるでしょ。

ヤワラ　やっぱり不良少女だよ、花さんって。

サチ　花さんそんな人じゃないよ。会えばわかるよ。

彩　瞳、次読んで。

瞳　「戦争の時、楽しかったことは何ですか」

彩　花さん何て答えてる？

瞳　「典子さんと映画に行ったこと。典子さんとレコードを聞いたこと。でも一番楽しかったのは典子さんと宝塚少女歌劇団を観に行ったことです。典子さんは私の兄・一郎兄さんの恋人でした」

有香　(あー)神風で死んじゃった。

瞳　「典子さんは、いつも明るく、頭もよく、背が高くてまるで宝塚の男役みたいでした。私に宝塚少女歌劇団を教えてくれたのは典子さんです。私が、宝塚の男役にあこがれたのは典子さんの影響です。私が戦争中いつも聞いていた『私の青空』を教えてくれたのも典子さんでした」

かおる　典子さんが花さんに教えたものって、だめって言われていたものばかりだね。

彩　宝塚もだめだったの？

かおる　(うん。資料を見て)まず、男装の麗人が廃止。最終的には休演。最終公演には警官が刀を抜いて整理に当たるほどたくさんのファンが押し寄せたって。

ヤワラ　だめなものばかり花さんに紹介する典子さんも、けっこう不良だね。

彩　瞳、続けて。

瞳 「戦争の時、尊敬していた人は誰ですか、そしてそれはなぜですか」「尊敬していたのは父、母、兄です。でも一番は典子さんです」

彩 典子さんなんだ。

瞳 (インタビューを見て)「私が典子さんのことを今でも尊敬しているのは、たくさんの命が失われていった時代の中で、私に生きることの大切さを教えてくれたのは典子さんだったからです。あの当時私は学校でいじめに遭っていました。死にたいと思ったこともありました」

有香 いじめって昔からあったんだ。

雷

怯えるサチと有香。

瞳 「典子さんは『いじめなんかに負けちゃだめ、生きていればいいことがある』と言って、私を宝塚に連れて行ってくれました。私は学校には病気と嘘をついて、典子さんと宝塚に行ったんです。『生きていればいいことがある』、それは典子さんの口癖でした。兄が戦争に出かけたときも、兄にそう言いました。そして、兄の戦死の報告があったとき、典子さんは『生きていればいいことがあったのに』と、いっぱい、いっぱい泣きました。典子さんはいつも生きること以前向きでした。宝塚を見ることも、『私の青空』を聴くことも、生きることなのだと、典子さんは私に教えてくれました」
かおる 私、典子さんてちょっと会ってみたいかも。

◆ 停電

落雷(稲光と同時に雷鳴)

あまりに強烈な雷に思わず叫ぶ有香、怯えるサチと有香。

停電

彩 今の雷、学校に落ちたんじゃない。

有香 うん。落ちたと思う。

サチ 学校に雷落ちてても大丈夫なの。学校燃えないの。

かおる 学校には避雷針があるから。

彩 サチ、雷は爆弾じゃないから。

かおるが展示の照明効果を高めるための非常用ランタンを中央の机に持ってきて明かりを灯す。

他の机にも非常用ランタンが置かれ、明かりが灯される。

嵐の音

瞳 これ、役に立ったね。

雷

怯えるサチと有香。

サチ 雷でもこんな怖いのに、爆弾落ちてきたら…

かおる 怖かったろうね。

みんなが窓の外を見る。

嵐の音

瞳　　なんか変な気分。

彩　　変な？

瞳　　展示で調べた戦争の時代にいるみたい。タイムスリップして。

彩　　戦争の時ってこんな真っ暗な中で暮らしてたのかな。

かおる　空襲の時はそうだったんじゃない。灯火管制で。

サチ　灯火管制って？

かおる　空襲の時、町に灯りがついているとそこが標的にされちゃうでしょ。だから警戒
警報が出るとみんな灯りを消したんだって。

彩　　戦時中ってこんな真っ暗な中で暮らしてたんだ。

瞳　　真っ暗な中で、何してたのかな。

サチ　花さん、音楽聴いてたって言ってた。

瞳　　真っ暗闇の中で？

サチ　うん。

ヤワラ　音楽、それいいかも。ねっ、あたしたちも何かかけようよ。

彩　　かけれないよ、停電だから。

かおる　そこのCDラジカセ使えばかけることができるよ。それ電池入ってるから。

彩　　でもここに音楽なんてないでしょ。

サチ　あるよ。あたし花さんから借りてきたの、花さんが好きだった音楽。

瞳　　『私の青空』？

サチ　うん。

瞳　　サっちゃん、私、聴いてみたいな、その曲。

サチ　いいよ。

サチが花さんから借りたCDをかばんから取り出し、それをCDラジカセにセットする。

有香　『私の青空』って禁止されてた曲なんですよ。

かおる　禁止された千曲の中でもトップの方にあげられてる。

有香　聴くのちょっとドキドキする。

ヤワラ　わー！

ヤワラの大声に、みんなびっくりする。

有香　ヤワラ、びっくりさせないでよ。

ヤワラ　（笑い）

サチ　かけるよ。

英語版の『私の青空』がかかる。

みんなその明るいメロディーにとまどう。

有香　これが禁止された曲？イメージと違う。

サチ　花さん、こんな感じで聴いてたのかな？

かおる　こんな大きな音じゃ聞けなかったろうね。警察に聞かれちゃうから。

サチがボリュームを下げる。

暗闇の中、小さな音で『私の青空』が響く。

サチ　こんな感じかな？

かおる　こんな感じじゃない。

有香　これ何て歌ってるわけ。

サチ　有香ちゃん、ここに訳あるよ。

有香　（訳詞を見て）「せまいながらも楽しい我家　愛の灯影のさすところ　恋しい家こそ私の青空」

瞳　（あー）青空って、自分の家のことなんだ。

サチ　どうしてこれが聞いちゃいけない歌になるの？

かおる　（展示に書かれてあることを見て）特にジャズは卑俗低調で退廃的と徹底的に排除され、飲食店からはもちろん、ラジオの音楽番組から締め出され、レコードはすべて回収された。

サチ　どういうこと？

かおる　要するに、明るくって軽いことで人の心をだめにするってことでしょ。

有香　こんな暗い中だったら、音楽くらい明るい曲が聞きたいけど。

彩　（窓のそばに行って）外、相変わらずすごい風だね。

サチ　この歌、台風のへそみたいだね。

彩　台風のへそ？何それ？

サチ　彩ちゃん知らないの？台風の真ん中って、晴れてるんだよ。そこがへそでしょ。

彩　サチ、それ台風の日だよ。

サチ　あっ、それぞれ、台風の日…。

瞳　サッチャン、なんでこの歌が台風の日なの？

サチ　外は嵐だけど、ここは青空だよ。

瞳　（あーっ）私の青空。

サチ　戦争の時、花さんの家、青空だったのかな？

瞳　戦争の時？

サチ　うん。外、空襲で爆弾落ちるでしょ。町中真っ暗でしょ。でも花さんの家は青空だったのかな？

サチが『私の青空』のボリュームを上げる。

みんな『私の青空』を最後まで聞く。

遠雷

稲光が生徒たちの顔に反映する。

瞳　花さん、タイムスリップした私たちをかくまってくれないかな。

サチ　花さんきつとかくまってくれるよ。花さんそういう人だもん。

瞳　花さんがかくまってくれれば、物語が動くかも。空襲の日、花さんどうしてたのかな。

彩 瞳、そのインタビューの中に、空襲についての質問があるはずなんだけど？

瞳 (探して)空襲、(あっ)、ある、ある。「七つ森高等女学校が空襲で焼けてしまった日のことを教えてください」

彩 花さん何て？

瞳 「七つ森高等女学校が空襲にあった日。それは私の人生の中で忘れることができない日です。忘れられない、でも思い出したくない、そんな日です。私は今まであの日のことを誰にも話しませんでした。でもあの日のことは伝えていかなければならないことなのかもしれませんね。私は、みなさんにあの日のことを伝えたいと思います。どうか、心の耳で聴いてください。あの日の夜、私は空襲警報で目を覚ましました。外に出ると、空にたくさんのB29が飛んでいました」

サチ B29って？

かおる アメリカの飛行機。

サチ どんな？

かおる (中央の展示に描かれているB29の絵とその説明を見て)この飛行機がB29。正式名はボーイングB29 スーパーフォートレス。高度一万メートルを飛行し、当時他の追従を許さなかった。

サチ それがいっぱい飛んでたんだ。

稲光が生徒たちの顔に反映する。

雷鳴。それはまるでB29による爆撃のように響く。

瞳 「私の家族は七つ森高等女学校に向かって避難しました。途中、典子さんと映画を楽しんだ映画館が燃えていました。学校に着くと、学校も燃えていました。私たちは学校の裏にある七つ森に避難しました」

サチ (窓の向こうにある七つ森を指して)花さん、あそこに避難したんだね。

有香 (立ち上がって)あそこからだと学校が燃えてるの見たね。

サチ どんな気持ちで見てたのかな。

ヤワラ 「きれー」とか思っていたりして。

サチ 花さん、そんなこと思う人じゃないよ。

瞳 私たちもし空襲の日にタイムスリップして、七つ森に逃げたら、そこで花さんに会えるね。

サチ うん。

彩 瞳、続き、続き。

瞳 うん。

稲光が生徒たちの顔に反映する。

雷鳴(遠雷)

瞳 「学校が燃えているのを七つ森から眺めていました。学校だけではなく、町全体が燃えていました。なんか映画を観ているような不思議な気持ちでした」

かおる 森も七つ森と二つ森以外はこの時に全部燃えたって。

彩 だから今、ほかの森、残ってないんだ。

瞳 「次の日、私たちは家への道に戻りました。建物という建物がみんな焼けて壊れていました。道にはたくさんの人が死んでいました」

有香 （うあー）

瞳 「あんまりたくさんの人が死んでいたの、死んでいる人を見ることが怖いと思いませんでした」

嵐の音

瞳 「私の家は…ありませんでした。空襲で焼けてしまいました。少女倶楽部も大好きなレコードも焼けてしまいました」

嵐の音

彩 焼けちゃったんだ、『私の青空』。

瞳 （声がつまる）「そして…」

サチ ひとちゃん…どうしたの？

瞳 「そして…、その空襲で、典子さんが死にました。私にいつも生きていればいいことがあると話してくれた典子さんが、大好きな、大好きな典子さんが死んでしまいました」

嵐の音

有香 死んじゃったんだ。

かおる 会って見たかったのに。

ヤワラ （泣き出す）。

有香 ヤワラ…

ヤワラに次いで有香がそしてサチが泣き出す。

嵐の音